しを相談する。

「近くの店にあるかもしれない。」と身軽に動いてくれた。先に立ってバヅラザデン広場を横切り、通りを渡った万屋に入る。しかしこの店にあったのは探しているタイプではない。彼に礼を云って、新市街をもう少し歩くことにした。プロヴディフの滞在も今日が最終日だ。

いざそのつもりで探すと、意外に調理器具の専門店がない。半時間ほどクニャズ・アレクサンドル・バテンベルグ通りの店を見て廻り、ほぼ諦めて宿へ戻りかけ、喫煙具や紳士用品の専門店が目にとまった。駄目だろうと思いつつも店内に入り、女店員にカメラモニターのソムリエナイフ(P.97参照)を見せる。

彼女は笑顔で応え、店頭の方へ行き陳列棚から木箱を取ると、蓋を開けてこちらへ差し出した。先ほどモニターで示したものと寸分違わぬといえそうなソムリエナイフに絶句する。今さら、「本当は(P.97上左画像)のようなものを探している。」など、云えなくなってしまった。「これもブルガリアを旅した記念と思えば良いか. . . .」と何となく納得する。120Lv(6,590円)だった。

しかし帰国後調べてみればレーニョアート(Legnoart)はイタリアのメーカーなのだ。そして通信販売ならば安いところは5千円強だった。なんたることか！

左：アコーディオンとヴァイオリンで民謡を奏でる老人。右：前に投げ銭用の帽子を置きバグパイプを演奏。

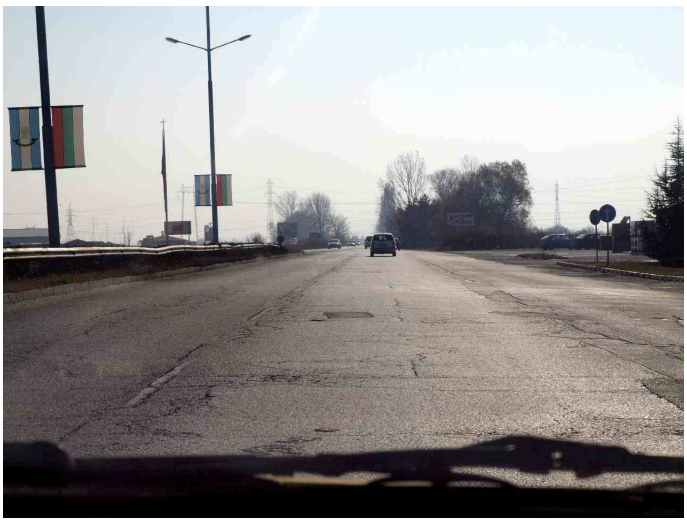
レーニョアートのソムリエナイフ。

１１．バチコヴォ(Бачково)

移動方法

明けて11月19日、朝食を摂りながらディミタールに移動方法をあれこれ相談する。この日向かうバチコヴォへは、距離的に30キロ弱なのでタクシー利用をほぼ決定していた。問題はバチコヴォからコプリフシティツァまでだ。プロヴディフからバスを利用するとなれば、バスステーションは市の北部で未知の場所だし、午後4時半発の一便しかない。カルロヴォまでは頻繁にバスがあるものの、そこから先の連絡は不明だ。タクシーは距離が120キロを越えるのでかなり高くつく。

鉄道利用はコプリフシティツァ駅から村まで8キロもあり、連絡バスは不定らしい。英ガイドには、



アセノヴグラトまでは広々した幹線道路を行く。

「もし連絡バスが来なければ、タクシーは無いし、駅長は電話が無いのでなんの援助もできない。携帯電話は通信範囲外だ。あなたは頑張って8キロの細い幹線道路を村まで歩くしかない。幸運を祈る！」などとゾッとしないことが書いてある。おまけに列車が着くのは午後5時半だ。このこともディミタールに話した。

"ОСУР" ЕООД
ТЕЛ : 0879 442 691
"ОСУР" ЕООД*ПЛОВДИВ
ЖК.ТРАКИЯ БЛ.191 ВХ.6
БУЛСТ: 201498584
ДАН.№:
НАЧ.ТАКСА 0.90 ← 1.基本料金
Т1 ЦЕНА 0.65 ← 2.キロ単価
КМ: 27.716 18.02 ← 3.距離と計算結果
ЦЕНА ПРЕСТОЙ 0.20 ← 4.渋滞加算単価
ПРЕСТОЙ 2:34МИН ← 5.渋滞時間(分:秒)
0.51 ← 6.渋滞加算料金
ОБЩА СУМА:
19.43 ← 1.+3.+6.=料金

1184 19-11-11 11:35
ВОДАЧ 1 PB3197KA
ФИСКАЛЕН БОН
ECO14663- 46049185

タクシーのレシートと各項目解説。

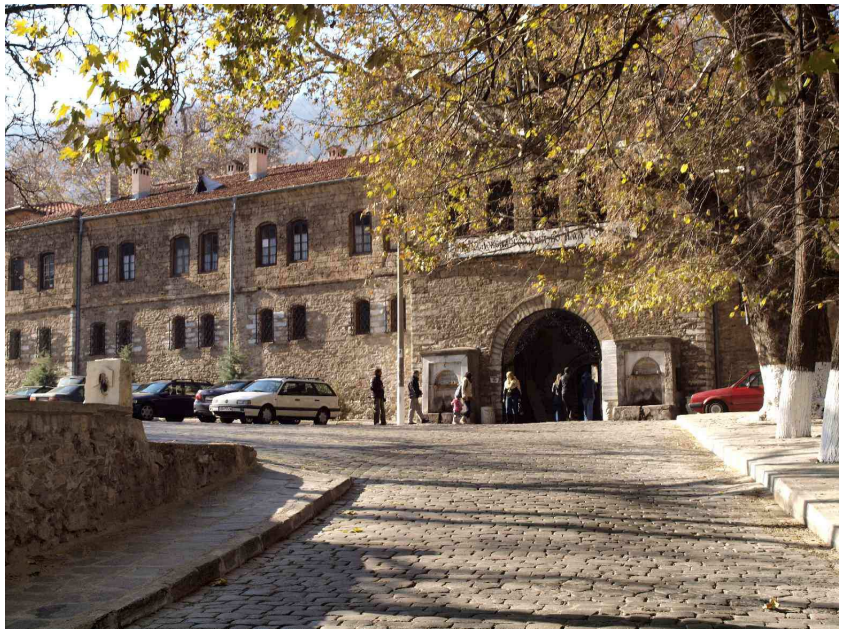
彼は、「ガイドに一日副業を頼むか？」なども考えてくれたが食事を終える頃に、彼の自家用車（マイカー）による移動を提案してくれた。これまでのネセヴァルからヴァルナやアルバナシからトリャヴナなどのタクシー料金を参考に、バチコヴォからコプリフシティツァまでを120Lv(6,590円)に決める。タクシーと同程度の料金ならば、彼と話しながら旅する方がずっと勝る。

バチコヴォに着くのが早過ぎれば、宿にチェックインできない可能性も考えられ、11時にチェックアウトした。三泊の料金は285Lv(15,652円)で、カードで支払う。タクシーを呼んで貰い、ディミタールと細君に送られてプロヴディフを後にする。舗装がだいぶ傷んでいるものの、幅が広くほとんど直線で見通しがよく、おまけに交通量が少ない幹線道路をアセノヴグラトまで行く。ここから先は相互一車線だけれど山道になった。

カーブの多い山岳道路を走ること約10分、11時半頃に広い駐車場が道端に見えるところで停車した。バチコヴォ修道院の入り口らしい。タクシーのメーターは19.43だったので、チップを含め22Lv(1,208円)支払う。

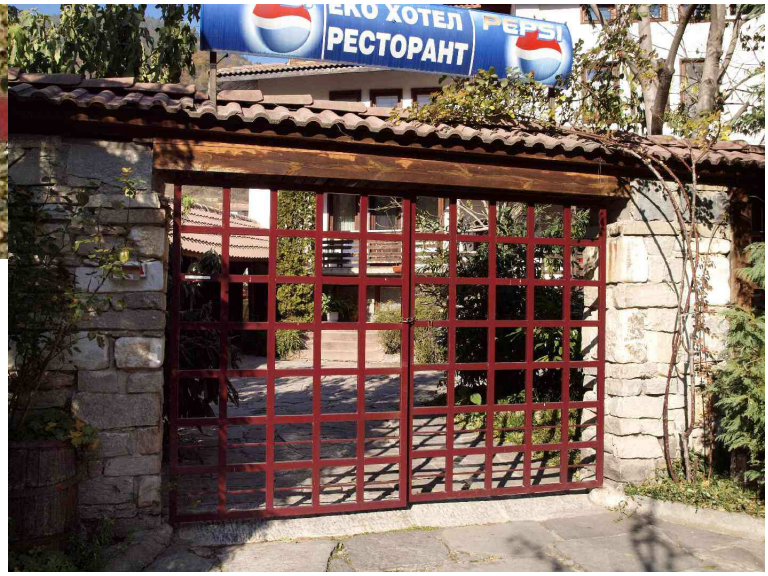
街道から枝分かれした登り坂道は、沿道に店が並び修道院への参道と見受けられた。英ガイド情報では修道院がバストイレ付きの部屋を提供してくれるはずだ。しかしこのガイドブックに対する信頼感はだいぶ低下していたので、修道院まで荷物を引っ張り上げるのは避けたかった。目の前に英ガイド推奨のレストラン・ボダポダ（滝: **водопад**）があり、いずれにせよ昼食は此処で摂るつもりでいた。そこで、「後で食事に来るから. . . .」と荷物預かりを頼んでみた。この目論見は成功し、笑顔で引き受けてくれる。

500メートルほど続く参道は、両側に土産物屋や飲食店が軒を接して並んでいる。シーズンオフだから、人出は大したことがないのだろうと思うが、それでも人通りが絶えることはない。そこ此処で肉を焼く炭火から立昇る煙などが食欲をそそる。坂を登って行くと突然沿道の店が途切れたのは、そこから先が修道院の敷地なのか。200メートル足らずでレンガ積み三階建ての建物が見えた。バチコヴォ修道院の外周だ。



バチコヴォ修道院。

同じ画像の部分拡大。鎖で閉ざされている。



エコ・ホテルのゲート。

外周建物に設けられたアーチのゲートをくぐり抜けると中庭で、正面に聖母教会がある。しかしゲートから先は撮影禁止だった。泊まれるかどうかをまず確認したい。英ガイドには、「宿泊に関する問い合わせは受付の二階で。」と記されているが、受付らしいものが見付からない。

仕方がないので売店に入って訊いたが、英語はまるで通じない。身振りを交えて修道院に宿泊したいことを何とか表現できたかと思うが、回答は否定的だった。質問も回答もともに信頼できないから、本当に宿泊できないのかは未だに不明だけれど、この場所に対する魅力を感じなくなり、それ以上頑張る気も起こらなかった。

時刻はまだ12時なので焦ることはないけれど、宿舎が決まらなければ気分的に落ち着かない。英ガイドに紹介されているのはエコ・ホテル一軒だけで、見回しても飲食店は数多いが宿泊できそうなところはない。先ほどタクシーを下車したところまで戻り、川を歩道橋で渡る。川沿いに30メートルほど下流に行ったところがエコ・ホテルだ。

簡単に辿り着いたものの、ゲートの鉄格子門扉に鎖でロックされ閉じてある様子は、長期の不在を感じさせた。かなり悲観的な気分になったが、呼び鈴が見付かったのでともかく押してみる。反応がないけれど結論を急ぐ必要もない。しばらく待ってもう一度、さらには三度目の正直で建物のドアが開きオバサンが顔を出す。

まだ泊まれるかは判らないので緊張は解かずに待った。門扉に近付いたオバサンは、ジャラジャラと鎖を引っ張って門扉を開ける。鎖は単なる仮止めなのを見て拍子抜けした。泊まれるか訊くと、英語は喋らないようだが大丈夫らしい。ようやくホッとする。

建物の中に入り、一応部屋を見せて貰う。広さ、清潔さ、静粛度など全てに満足し、二泊を頼む。バチコヴォにはそれほど長居したい気分では無くなっていたが、ディミタールが迎えに来るのが明後日で、電話してこれを変更するのは面倒だし不可能かもしれない。そして修道院はともかく、山間の聚落は一日を無為に過ごす場所として、好ましくも感じられるのだった。

宿が落ち着けば、荷物を預かって貰っていることもあり、次は昼飯昼酒だ。歩道橋を渡り徒歩1分のレストラン・ボダポダへ行く。2階の客席には12時半だというのに客の姿はなく、いずれも年配のウェイターが4人ほど暇そうにしていた。

一応、預かって貰った荷物を受け取り、席はどこでも良いらしいので片隅の窓際を選んだ。もたらされたお品書きを開くと、キリル文字ばかりが並んでいる。おまけにウェイターは英語を話さない。ほとんどお手上げかと思ったとき、オバサン（ウェイトレスよりはもう少し偉そうだった）が登場。彼女は何とか英語を話す。

ボダポダの店内。食事終了後に撮影。

上：ショプスカサラダ。下:焼き肉。

ともかくショプスカサラダで一品。他にも色々あったようだがどんなものか見当が付かないし、彼女の英語もこちらも共に怪しげだから安全第一の選択だ。問題はメインで、お互いコミュニケーションに苦闘した結果、焼き肉的なものだろうと思われる一皿を頼んだ。ワインは赤を値段で。もたらされたボトルには葡萄の品種を表すмавруд(マヴルッド)が印刷されていた。ワイナリーはどこだか良く判らない。

しかしそんなものが判ったところで、どうせ知らない銘柄だし、ともかく飲んでみればご機嫌な味わいだったので、ブルガリアワインに対する信頼感が一段と増す。ショプスカサラダはごく平均的な素材と出来具合だと思う。

そして焼き肉。サラダに遅れること25分でテーブルにもたらされた。日本の平均的な焼き鳥に使用されるものより三倍ぐらい大振りな肉塊を(多分)串焼きし、それをバラしてソースをかけたのかはたまた最後にオーブンで焼き直しているのか不明だが、そんな感じがする一品だ。

奥歯に問題もあるので、小さめに切り分けながら食べる。付け合わせのジャガイモ団子も、ソースを適当に絡めて食べると美味い。結局1時間強で締めのミルクコーヒーになった。勘定は、焼き肉16.5Lv(906円)、サラダ4.8Lv(264円)、ワイン15Lv(824円)、パン3Lv(165円)、コーヒー2.5Lv(137円)、ミルク0.2Lv(11円)だった。

バチコヴォ修道院

宿へ戻り一眠りして、目が覚めると3時半だった。このまま部屋でくすぶっているのも芸のないことだし、窓から覗う表の様子は、穏やかに黄昏れ始めたところだ。散歩がてら修道院を再訪することにした。

石畳の参道は土曜日のせいなのか、相変わらず参拝者が途切れず歩いている。午前中より若干多いような気もした。

北の中庭にある聖母教会。インターネットから採取。

修道院入り口付近に設置された看板。付近のハイキングコースに関するコース別所要時間だろうか。

先ほどは中庭にこそ足を踏み入れたものの、聖母教会内部はまだ未見だった。一応覗いてみようと入り口まで行くと、立ち止まることこそないが、行列状態で入る列と出る列が動いている。流れに従って中へ入った。

天井ドームや周囲の壁は壁画で埋まっている。質的な評価は私の能力を超えているが、感覚的な判断ならば、「あまり好きになれない。」だった。イコノスタシス辺りに関しても同じような感想だ。

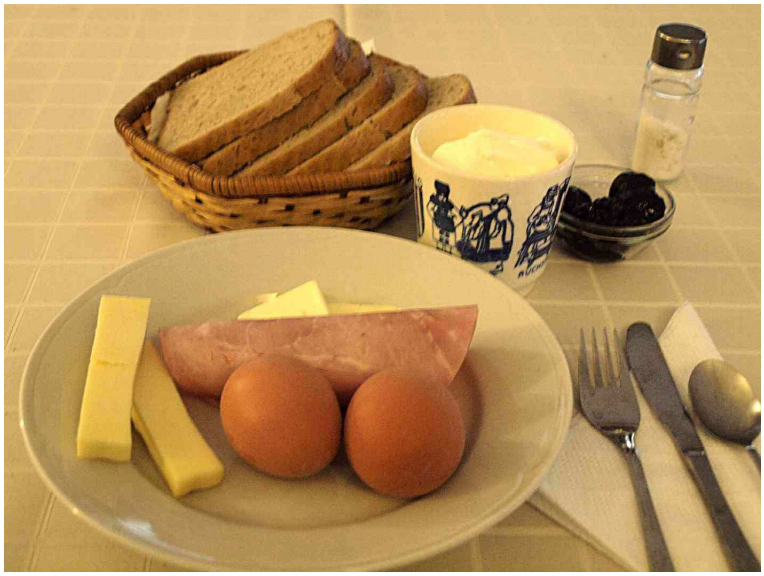
しかし訪れている人はほとんどが信徒らしく、そこ此処で熱心に祈りを捧げ、イコンに口づけをしている。その中でひときわ大勢が礼拝しようと列を作るイコンがあった。額縁を銀で装飾され、ブルガリア・オフィシャル観光サイトには、「1311年に銀メッキが施された、奇跡を起こす力があると信じられている聖母のイコンがあります。」と紹介されている。

どうもこのイコンなるものが良く判らないのだが、ウィキペディアでは、『信仰の対象となるのはイコンそのものではなく、イコンに画かれた原像である。このことについて、正教会では「遠距離恋愛者が持つ恋人の写真」「彼女は、写真に恋をしているのではなく、写真に写っている彼を愛している」といった喩えで説明されることがある。』などと解説している。しかし奇跡を起こすイコンということになると、「原像」ではなく「そのもの」を重要視しているみたいだ。良く判らない。

教会を、そして修道院を出て、ハイキングコースかなと思われる方向へ足を向ける。修道院の中庭が雑踏していたのとは対称的に、こちらでは人影はほとんどない。参拝に訪れる人がほとんどなのだから当然だろうが、人混みから開放されるとほっとした気分になる。

修道院から400メートル弱のところに、石造りのこぢんまりした建物がある。日ガイドにある、「破壊を免れた創建当初の納骨堂」だろう。同ガイドには、「12世紀に描かれた壁画『聖母マリア』『大天使ガブリエル』などが残っている。〈中略〉コムネノス朝時代の最盛期のもので美術的に高い評価を受けている作品である。」とのことで、掲載されている画像からも期待が大きかったが、建物の入り口は閉ざされ、人気(ひとけ)も全くなかった。

上：良く整備された道が納骨堂まで続く。下：いわゆる名水なのか。パイプで送水され吐き出し口に配水されている。



朝食。

バチコヴォ逍遥

11月20日、気持ち良い青空の朝を迎えた。8時半に朝食のため階下へ降りる。食堂部分は灯りが消されていた。TVらしい音が聞こえたので、そちらへ行くと老婦人が一人TVを見ている。背後からドブロウートロと声をかけると、振り向いて笑顔を浮かべ、女将の名を呼んだ。

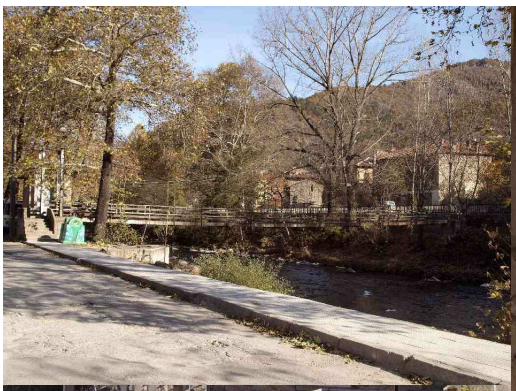
パンとハム、茹で卵2箇、チーズ、バタ、砂糖漬けプラム、ヨーグルトとミルクコーヒーの簡素だけれど充実した朝食を摂り終え洗濯物の交渉に取りかかった。話は前日に遡る。修道院から戻って、部屋で寛ぎながら、ぼんやりとヴェリコ・タルノヴォで11月10日にカッターシャツを洗濯してからほぼ10日過ぎていることを考えた。プロヴディフで洗濯屋を探せば良かったが、この村にはなさそうだし、これから先ソフィアへ戻るまでは辺鄙な場所を辿って行く。

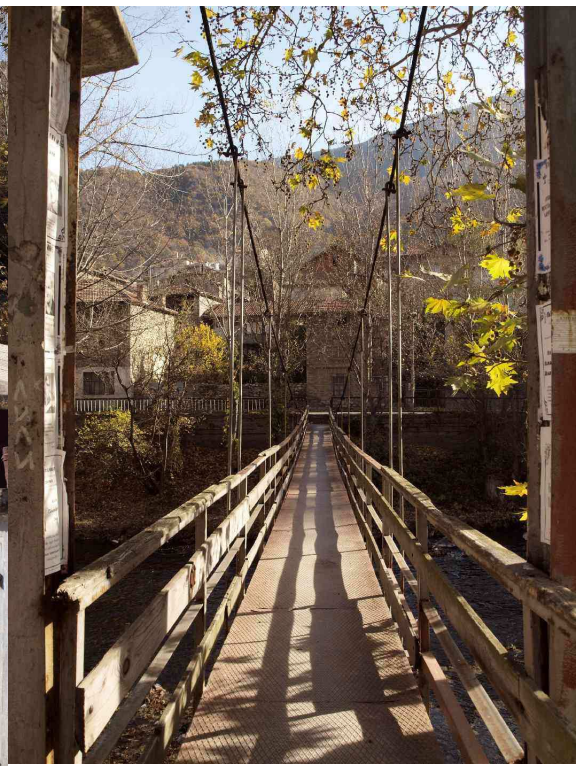
やむを得ず手洗いするかと思ったとき、一案が浮かび上がった。ホテル業を営んでいるならば、当然洗濯機、乾燥機、アイロンなどの一式は揃っているはずだし、他に客もいないことで女将は暇に違いない。交渉するのに英語が通じないことが障害だけれど、それはヴェリコ・タルノヴォで受け取った勘定書（P.67参照）を利用すれば何とかなるだろう。わざわざ女将を捜し出すのも面倒で、翌日の朝食時に切り出すことにした。

このような経緯で伝票を持ってバーカウンターの前に佇んでいた女将のところへ行く。ともかく伝票を見せると、一瞥してから（多分）、「この村に洗濯屋はない。」みたいなことを云う。此処まではほぼ予想通りなので、これから身振りを交えて、「この宿で洗濯して欲しい。料金はこの伝票程度支払うから。」ということを数分がかりで何とか伝えることができた。交渉は成立し、料金は6Lv(330円)と、タルノヴォよりは若干高かったものの、これで手洗いせずに済めば御の字だ。部屋に戻り洗濯物をレジ袋に詰めて彼女に渡す。

10時半を回って部屋での読書にも飽き、散歩に出かける。宿のある左岸を上流方向へ歩いてみたが、すぐに村外れになり、道路も途切れている。

踵を返して下流方向へ。400メートルほどのところに食品店があった。





左上：宿から400メートルほど下流の歩行者用吊り橋。右：歩行者用吊り橋は縞鋼板が敷かれていた。
左下：村の食品店。看板にはフルーツ、野菜、ビール、ソフトドリンク、コーヒー、アイスクリームなどの文字。

右岸の下流側から見たエコホテル。並んだ縦長小型窓のすぐ右にある横長窓が泊まった部屋のもの。

食品店の左隣にはガラス窓から内部の見える小屋があり、椅子テーブルが置かれコージーコーナーとでもいうのだろうか、近所のオバサンらしい人達がお茶を飲みながら談笑していた。

食品店の品揃えを概観し、散歩中に荷物を増やしても仕方ないので購入は後ほどにする。店のちょっと下流側に歩行者用の吊り橋が架けられていた。実のところ、バチコヴォ村で人家がもっとも多いのは、この橋を渡って幹線道路の向こう側にある傾斜地なので、この辺りに橋があるのも道理なのだ。

しかしブルガリアにおけるこのような構造物（橋など）に関する管理態勢を（根拠もないのに）まるで信用していないから、おっかなびっくりで渡ったのだった。

村の中心部はざっと見たところ旧い建物があるわけでもないし、街路に雰囲気もなく、つまらなそうなのでそのまま右岸を上流方向へ戻る。

昨日タクシーを降りた場所まで行き、瞬時迷った。しかし幹線道路を辿っても仕方ないし、左岸に道がないのは最前確認したばかりだ。結局修道院を再訪することになった。

日曜日のせいか、修道院の中庭はごった返し、聖母教会の内部はさらに混雑している。昨日もそうだったが、中庭をがさつで感じの悪い警備員が二人ほど、撮影禁止だと触れ回っている。そんなことでカメラはバッグにしまったままだったが、中庭を見回せば、あちらこちらでコンパクトカメラを手に取り記念撮影をしている。

警備員はこの連中のすぐそばを通ってもなんら反応せず、納得がゆかないので一番近くにいた警備員にカメラを構えている人を指して訊いてみた。答えは、「パーソンOK、パノラマNO。」で、要するに人物の記念写真ならば良いけれど、建物などを写してはいけないということらしい。

記念写真を撮ることを装い、建物を撮影するようなせこい手段もあるだろうが、生憎一人だし、修道院建物に対する撮影意欲は薄れていたので、リモコンを使用しての自画像撮影などまですることもなかった。

日ガイドには、修道院内の食堂や南の中庭にある聖ニコライ教会なども見所としてあげられていたものの、この時期は閉鎖されているのか入り口らしいものは見付からず、中庭を動く人の流れにも、それらしいものは皆無だった。

修道院見物は終わりにして、ハイキングコース方へ向かう。修道院前広場の外れに、（多分）各コースの目安時間を示した看板と、略図を表示した看板が並んでいる。しかし全てキリル文字なので、想像

ハイキングコース案内図。実線が保護区の境界線で点線が歩道（トレイル）。執筆にあたりグーグル翻訳で調べたが、これを見たときは想像するしかなかった。

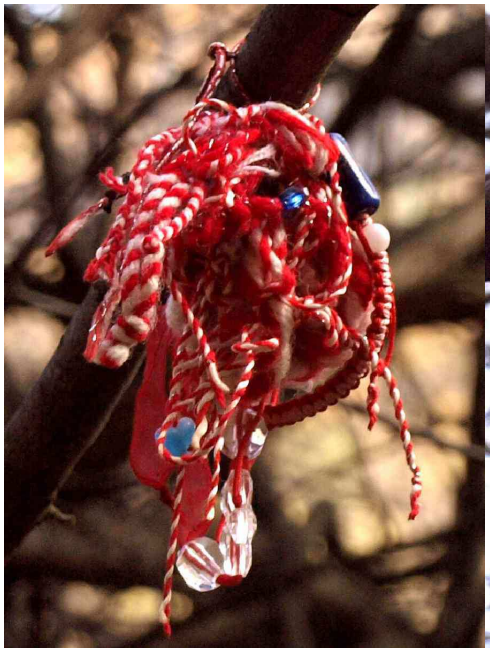
修道院創建当時に建てられ、近年修復された納骨堂。

マルテニツァ

マルト（март）はブルガリア語で3月を表す。まだ厳しい寒さが残り、天候も不順なことが多いため、気むずかしい老女になぞらえ、三月をババ・マルタと呼ぶ。ちなみにババ（баба）は婆に通じるみたいだが、れっきとしたブルガリア語。

ともかくこれにちなんだ春の祝いが3月１日に執り行われ、そのときの縁起物でありババ・マルタに対する貢ぎ物にもなるのがマルテニツァで、家族や友人知己の間で交換される。小さくて人形ともいえる房飾りは地方などにより様々なバリエーションがあるけれど、基本は赤と白の毛糸や緩く撚った綿糸を使うことで、形状は人形以外に、腕輪の形になっていたり、バッチだったりする。

貰ったらお守り替わりに、胸に飾ったり手や首に巻いたりして身に着ける。マルテニツァを身に着けるのは3月１日から初めてのツバメまたはコウノトリを見かけるまでで、それ以後着けているのは良くないこととされてる。外したマルテニツァは豊作の願いを込めて花の咲いた木へと結ぶ。



ハイキングコースで見かけたマルテニツァ。多分今年のものと思うが、かなり風化している。

八割の解釈では危なすぎて深入りできない。ともかく気の向くままに道を辿り、迷わぬうちに来た道を忠実に引き返すことにした。

ハイキングコースも最初の部分は一本道で、昨日も歩いたものだ。納骨堂の横を通り、「もしかしたら日曜日には開いているかもしれない。」との淡い期待があったが、やはりひっそりと静まりかえっている。虚しく横を通り過ぎた。

納骨堂から先が（一応）ハイキングコースなのだと理解する。道は良く整備され、快適に歩くことができるが、ほとんど人に出会うことはない。しかし比較的隣接してコースがあるのか、風に運ばれて話し声が聞こえると、なぜか長閑な気分になった。

コースには見所などもあるらしいが、情報不足でどちらへ行ったらそうなのか良く判らず、しばらく歩き廻って散歩を終わりにする。参道まで戻ってみると、先ほどより一段と参拝する人々が増えている。

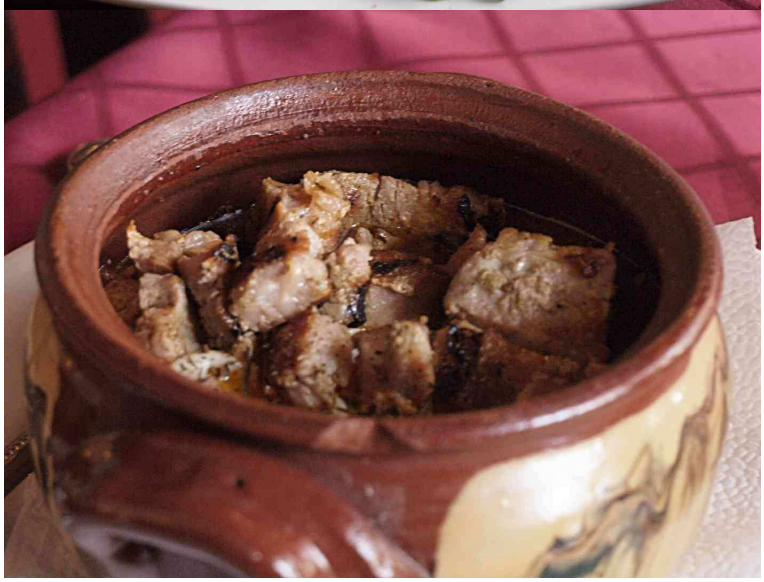
沿道に並ぶ店を見物しながらぶらぶら坂を下った。屋台店的な感じでものを喰わせるところが多く、元々屋台好きなのでこのようなのを見ると食指が動くこと甚だしい。とりわけモウモウと煙を上げて焼くケバブなどは、「昼飯が食えなくなるから我慢しよう。」と思いながらも、なかなか諦めがつかなかった。

参道で見かけた焼き肉屋。ケバブとキョフテが0.6Lv(33円)。

参道土産物屋の店先。マッサージ器具だろうか？

後から考えれば、屋台を何カ所か食べ歩けば良かったのかもしれない。しかしこのときはともかく誘惑を振り払って食堂ボダポダの階段を登る。12時を廻ったばかりで、食事時には早過ぎたのか、日曜日なのに店内に先客はいなかった。

ブルガリア語だけのお品書きを持ってきたウェイターは、気を利かせたのか昨日の英語を話すオバサンを差し向けてくれた。しかし彼女の英語も大したことはないし、それ以上にこちらの英語耳は駄目なので、なかなか注文すべき品が決まらない。挙げ句の果てにともかくグリーンサラダを昨日がショプスカだったので変化を求めて決めた。ワインは昨日と同じものに、しかしメインが決まらない。



上：ボダポダのグリーンサラダ。下：壺焼きシチュー。

何となく食べたくなったのはサチ（P.56参照）だったが、この時点では名前を知らなかった。そこで仕方なく、拙い英語でしどろもどろにどのような料理か説明する。彼女は頷きながら聞いてくれ、それなりに思い当たるものがあったようだ。正解をあまり期待しなかったものの、これまでブルガリア料理で大外れはなかったから、ともかくそれにした。

サラダをツマミにワインを飲んでいると、予想よりは早くメインが登場した。陶器のポットに肉とハードチーズ、ソースが入り、オーブンで焼いたようだ。想像していたものとだいぶ違ったが、食べてみれば美味かったので満足する。ちなみに英語力以前に記憶が曖昧で、かなり誤った説明をしていた。サチを一言でいえば、ブルガリア風鉄板焼きなのにそれを、「陶器のポットに入って．．．」とやっていたのだから。

今回もミルクコーヒーで終わりにする。勘定は、ワイン15Lv(824円)、サラダ6.8Lv(373円)、シチュー11.8Lv(648円)、コーヒー2.5Lv(137円)、ミルク0.2Lv(11円)。チップ3.7Lv(203円)を合わせて40Lv(2,197円)をテーブルに置いた。

宿に戻って夕方を迎える。散歩がてら、村の食品店まで買い物に。昼間は隣でオバサン達がお茶を飲んでいたが、今はオヤジ達が店の前で道路を挟んだ川端に置かれたテーブルの周りに集い、楽しそうにビールを飲んでいた。店内に入りミネラルウォーター1.5㍑0.85Lv(47円)、ヨーグルト500cc1.3Lv(71円)、ネクター200cc二個2.1Lv(115円)など買う。